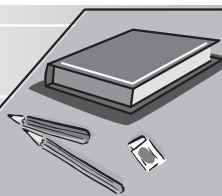


学生時代と図書館 76

—図書館の意義—

伊藤 秋仁



まとまった調べ物をしたり、論文を書こうと思えば、図書館の書架に向かい、分類されている書物を何冊か手に取る。パラパラめくったり、メモを取ったり、あれこれ考えながら、海のものとも山のものともつかぬ茫漠としたアイデアから、糸口を見出して、それを手繰っていく。その糸はもつれたり切れたりしながら少しずつ形になる — このような図書館での当たり前の経験も、コンピューターによってトレースされ、より洗練され、精緻になり、米国でクイズのチャンピオンがコンピューターに敗れたように、人間の営みを凌駕してしまうのであろうか。

コンピューターネットワークの上に保管されている情報は今後、ますます増え続け、これまで何世紀もの間、書物という形で紙の上に集められた情報を、質でも量でも、早晚、凌駕するのは間違いない。かつて何か調べようと思えば、図書館以外に頼りになる場所はなかったが、現在では、インターネットの発達により、ちょっとした調べ物はPCのキーを叩いて済ませるようになった。そのせいか、図書館に頼る機会は随分減ってしまったように思う。

学生時代、図書館は差し迫った用があるときも、取り立てて用がなくても、当たり前足運ぶ場所だった。社会人になると、せわしない日常の中で図書館に足を運ぶ機会は減ってしまった。具体的な必要がない限り、図書館に足を運ぶことは少なくなっている。それでも、たまの休日などに、図書館の日常とはまったく異なる時間が流れる中に身を置くと、学生時代、図書館で過ごした時間を思い出す。「知」という人類の財産が集積した場所で、「知」を尊ぶことを身をもって学んだ経験は、何物にも代えがたいものであった。

これまで国内外、様々な図書館の恩恵を受けた。学生時代は母校の図書館に加え、他大学の図書館を利用させてもらうこともあった。見ず

知らずの同世代の学生に交じって一人で静かに書物の世界に浸るのは、まったくもって幸せであった。平日の昼間には居住地近くの公共の図書館で時間を過ごすことも多かった。人気のない世間の喧騒とは無縁の世界で本を広げた。館内の片隅の机にはいつも同じ顔があった。ホームレスの人たちだった。彼らは係の人から注意されないように机の前に辞書を広げ、いびきをかいていた。当時の私は彼らに決して温かい目を向けたわけではなかったが、年を重ねてみると、それもまた重要な図書館の役割の一部であるように思う。本さえ広げれば、誰にも居場所があり、そして居眠りもできる。

今年の3月、未曾有の自然災害が発生し、多くの町が壊滅的な被害を受けた。圧倒的な自然は現代の文明社会を蹂躪し、人間の存在のはかなさを浮き彫りにした。固唾を飲んで眺めた一連の報道の中に、衣食住もままならぬ中、罹災者の多くが書店の再開を心待ちにしているというニュースがあった。このことは改めて私に図書館と人類の営みの関わりについて考えさせた。人類は、アレクサンドリア図書館から日本の文庫と呼ばれる図書館まで、洋の東西を問わず、知的財産を守ってきた。功利的な面ももちろんあったであろうが、「知」こそが、理不尽な運命に抗う唯一のすべであることを先人は奥底で悟っていたのではないだろうか。どれほどヴァーチャルな世界が興隆し、情報の形態が変わろうとも、私たち人類にとって図書館は不可欠な場所に違いない。図書館にはこれまでの人類の営みと知恵が詰まっている。図書館はこれからもわれわれに大切なものを与えてくれる存在であり続けるだろう。

いとう あきひと

(准教授・ブラジル地域研究・ポルトガル語学)